

岩屋緑地のきのこ図鑑



NO. 24 ハルシメジ

イッポンシメジ科イッポンシメジ属、和名：春占地、別名：シメジモドキ（占地擬）。春、バラ科の木の下やその付近の地上に群生、または束生する。ハルシメジのカサは幼いころは中央に出っ張りのある饅頭型で、成長するにつれて、中央の出っ張りを残したまま平らになっていく。色は灰色～帯灰褐色で表面は繊維状。ヒダの色は最初は白色で成長するにつれて桃色を帯びていく。柄は全体的に太めで中実、根元は太くなっており、色はカサの色とほぼ同じ。カサと同じく、表面は繊維状で基部に白色の菌糸が見られる。肉は白色で味は特にないが、歯ごたえが絶妙。その他の特徴としては弱い粉臭がする事がある。食用キノコで果樹園などにも発生するが、農薬には十分な注意が必要。【写真：ハルシメジ】

あんな話
こんな話

国産トリュフの人工栽培成功

高級食材トリュフの中でも希少性が高いとされる白トリュフの一種について、森林総合研究所は9日、試験的な人工栽培に国内で初めて成功したと発表した。栽培技術が確立できれば、安定的な供給につながると期待される。同研究所は確立までに10年程度を見込んでいる。トリュフは地中で育つ香り高いキノコで、世界三大珍味とされる。黒トリュフは欧州で人工栽培が行われているが、白トリュフは天然物だけ。国内でも20種類以上が自生するが、人工栽培技術は確立しておらず、高値で輸入されている。同研究所によると、人工栽培に成功したのは欧州の白トリュフとは系統の異なる「ホンセイヨウショウロ」。岩手県から岡山県にかけて自生しており、同研究所などの分析で2016年に新種と判明した。この胞子をコナラの苗木の根に付けて17年から関東と関西の4試験場で育てた結果、茨城県と京都府の2カ所でトリュフが生えた。（時事通信社 2/9(木) 15:04 配信 【写真：試験的な人工栽培に成功した国産白トリュフ（森林総合研究所提供）】



奈良公園の鹿「まさに生きる文化財」

あんな話
こんな話

奈良公園の鹿から“他地域にない”独自の遺伝子型。「神の使い」で保護され他集団と1000年以上交わらず。（ABCニュース・テレビ 1/31(火) 16:40 配信）「神の使い」奈良公園の鹿が、独自の遺伝子型を持っていました。福島大学や奈良教育大学などの研究チームは、奈良公園や紀伊半島のニホンジカのDNAを抽出し、遺伝解析をしました。その結果、奈良公園の鹿からは、他の地域にはない独自の遺伝子型が見つかり、1000年以上にわたって、他の集団と交わっていないことがわかったということです。周辺地域の鹿の群れが、森林の減少や狩猟で消滅する中、奈良公園のシカは「神の使い」などとして保護され、この遺伝子型を持った集団が生き延びたと考えられます。福島大学大学院・高木俊人さんは「宗教的な保護によって独自の集団として成立し維持されてきた、珍しい希少な存在。まさに生きる文化財のようなもの」と言っている。【写真：ABCニュースの画面より】



編集後記

コロナが下火となってきた。WBCで侍ジャパンが大活躍、劇的な優勝を飾った。皆で植樹した桜が咲いた。明るい話題に満ちた春だ▼2年にわたった「四季ときめきの森」の枯木・巨木の伐採が終わり、森が明るくなった。明るくなったら森が次はどんな姿に変わってゆくのだろうか▼2月には第20回市民参加シイタケ菌打ち体験が行われた。しかし2ページに特記するべき活動が見たらなかった。前例のない1面記事を2ページにわたって掲載することにした。▼3月26日(日)の令和4年度最終活動日の作業の様子を記事にする予定にしていたら残念ながら雨で流れた。思う通りにはなってくれず組み直し、書き直しとなった。(Y・M)